（四日夕刊）

磐城新聞

休刊　大祭第一第三日曜
定價（壹枚二錢、壹ケ月五十錢、郵税十錢）
廣告料（一行五十錢指定廿錢増）
發行兼編輯印刷人　蓬沼龍輔
發行所　福島縣平町田町拾六　磐城新聞社　電話五六四番

創作「お雪とその周圍」（二）

福田將夫

すると、其處へ不意に妹の都代子が這入つて來た。輕い驚きに襲はれながら振り向いて見ると都代子は生れて二ケ月とも過ぎないやうな赤子を抱いて居た。その跡から母が追ふやうにして部屋へ這入つて來た。そして二人共に意味あり氣ににやにや笑つてゐた。

自分の部屋へ自分の居る時母が這入つて來ると言ふことは、本當に稀であつたのでわたしは、どきどきしながら、起き上がり樣其處ら邊りに散ばつて居る雜誌や新聞を急ひで片付けながら

「さあお坐り！」と、少なからず固くなつて居た。

何故か知らん、母と都代子とはわたくしのどきどきするのを見ると、よけいに意味あり氣に笑ひながら

「え〻有難う」態う母が云つて、二人は並んでわたしに向ひ合つて坐つた。わたしは一用なんだらうと、第一に考へた。しかし心にわたるやうなことはなかつた。とは云ふもののなにか知らんぶちつけに聞くことも出來なかつた。

母も都代子も、意地惡く默つて居る、わたしはせうことなしに都代子の膝に居る赤子が目に止つたので

「これは何處の子供ですか」と聞いた。すると母と都代子とは素早く顏を見合せた。

「これはお前、あの、お前知つてゐるお雪の生んだ子供だよ」と母は努めて母親らしいもの〻云ひやうをして眠つて、わたしの顏を覗くやうにして見た。わたしは若いまだ母らしい親しみの生じて居ない女から、お前と云はれた可笑しさにただぼんやりして居た。實際お雪の生んだ子供よりもその時のわたしには母から始めて、お前とよばれた事實の方に興味を惹かれた。

「抱いて御覽よ、子供つて可愛いいものだよ。ね」

「面白くもない。其麼子供を抱いてみたつてはじまりますまい」

母が餘り可笑しな事を云ふのでわたしは少しむつとして居た。

暫くすると、母も都代子も不思議さうな表情を現はし見せながら出て行つた。

わたし何處迄も邪氣のない學生であつたのだ。そのことに氣付いたのは、ずつともう一年も過ぎてからであつた。それも自分で氣付いたのではなく母に聞かされて始めて知つたのであつた。

わたしは札幌の工業を或る事情の爲に中途に退學して、音江に農夫をしてゐる知人が居るので其處へやく一年計り行つてゐた。それから、再び士別の家へ歸つた時であつた。

「お前、あのお雪がまた私生兒を生んだよ」

と母は私が旅から歸つて落着くのを待つて云つた。わたしはお雪と云ふ女の名さへ忘れてゐた。

「お雪つていひますと」

「それ、家に居つて、私生兒を生んだことのある女中さ」

「はあん」わたしは漸く氣が付いた

「い、其麼女が居ましたね、しかし、その女が私生兒を生んだつて什うでも好いぢやありませんか」と、わたしは思ふ通りばすばすと云つた。わたしはもう十八歳であつた。すると母は一人くすりくすりと笑ひ出したあとで、わたしの顏をぢろぢろと眺め廻した。

「可笑しいな、什うしたと云ふのですか」

「ぢや、お前あの時分でも少くも氣付かなかつたのかい」

「なにをです」

「お坊ちやんだつたのだね、あのお雪が初めて生んだ子供を、みんながお前の子だとのみ思つてゐたのだよ、そしてお雪が二度目の子供を生むまでみんながさうさうお雪の親までが、お前がお雪に子供を生ませたものと信じて居たよ」

わたしはなんと返事をすれば好いか分らなかつた

「ぢや誰もその時迄お雪にその事をたづねなかつたのですか」

默つても居られないので暫くしてわたしは態う云つた。

「みんながお前の、お前の子供だと計り思ひ込んで居たら、聞こうともしなかつたのだよ、それにお雪のふた親と來ては本當に陽氣なんだからね、子供が生れたらしやうがない。でもまあ他の男の子でなくて、お前の子だつたら、世間に對しても恥しくないと云ふ風なんだから」

「僕は好い面の皮ですね」

「それにお前、お雪は一人子だらう〻でお前の子供を産んだとでも、家へ寄越す譯にもゆかず、と云つたとて、お前を異塲か養子にも出來ないのだから、まあ諦めてなんにも聞かなかつたらしいのさ。わたしらの方ぢや、こちらから口出すことぢやないから、向ふが默つて居るのを幸ひにして知らん振りをして居たのだよ

❀明日の吉凶❀

新暦九月七日　舊暦二月二十五日

▲一白　計畫大にして實蹟のこれに伴はざる日▲二黒　目前の大利を見ながらも手出しの出來ぬ日▲三碧　至誠を以てすれば何事も順調に運び行くべし▲四綠　出先を愼めば他は順調にて心配はなき日▲五黄　外事にのみ熱中するときは内は空虚となる▲六白　午前の苦は一時のこと午後は樂〻なるべし▲七赤　調子に乘り過ぐる時は意外の失敗あるべし▲八白　氣の遊びを去らざれば進行いよ〳〵鈍り來るべし▲九紫　破れを含む日増資普請旅行等は見合すべし

講談　幕末秘帖　狂怒乱心（32）

渡邊默禪作　宮野歌春畫

音五郎は焦つたさうに舌打して

「チヨツ、解らねえ爺さんだな、死了つたから死了つたといふんだ、それに逢はせられないといふお前さんも隨分解らない人だ」

「わツ、面倒くせねなア、理屈は有らうが無からうが逢はせたくとも逢はせね譯にはいかねわから、逢はせられねえと言つてるのが通じないのか」

「ツレ、それが間違つてる」

「ど、ど、何處が間違つて？」

「恐らく正氣ぢやアあるまい」

「どつちが……手前の方がもうろくしてやがる癖に毆り飛すぞ、這ン畜生」

「食ひつくぞッ」

双方とも早呑込の一人合點な所へ力こぶを入れたので話が妙に狂ひ出した。音は稍とそれに氣が注いて

「アハ、、、、こいつア不可ねえ、俺の話樣も惡いがヤア、お前の聞樣も惡いから飛んでも無ね方へ彈丸がそれたんだ、コウ、父さんお前、梅の殺された事情を知るめえ」

「えツ、殺されたッ？、ど、ど、どうし？」

「ツレ見ろ、突驚するぢやねえか、只死んだと言つたんぢやア成程眞實だア思はれまいが人に殺されたと言つたら合點がいくだらう」

「喫驚せずにゐられますかい、彼麼元氣なお方が鬼のやうな浪人衆を二人までも美事に叩ツ斬つた、天狗もはだしのお腕前で、こ、この殺されたといふのはそ、そ、れや一體どど、どういふ間違ひで」

與平はうとげな眼が光らせて、飛揚るやうに身を起した

「そ、それがよ、河童の川流れでなまじ好い腕を有つたのが彼奴の躰に間違の出來る原因であつたんだ、その浪人さへ叩き斬らなけりやア、何事も無かつたにと、悔んで見ても追着かねえ、コウ爺さんの前だが私も片腕をもがれてがつかりしちまつたんだ」

と自伍至什を語る中にも頻りと鼻を酸らせる。與平は首がつくり力なげに溜息を吐く。

「でまア、俺もなその儘に抛つとく譯にはいかねえから是から新徴組の屋敷へ出掛けし行つて切めて死骸だのなりとも引取つて來て埋葬を濟して遣らうと思つてる所だ、イヤ老少不定人間の命くれね詰らねわ物は無えなア」

「何ともハヤ申さうもない話だ、ぢや親方、私も來た序に御一緒に參りませうそうしてその死骸を一目なりとも見た上に雪江とたつしやる御女中から頼まれた御手紙と包がござせわすからそれを手向けて歸りませう、そしたらお使に立つた念も屆くといふものです」

「そうか、ぢやア一緒に出掛けよう」

直と相談が纒まつた。二人は連立つて本所三ツ目の荘内屋敷に赴いたもの〻、玄關先に突かけて尋ねて見るも、何となく氣がとがめる。で先づ樣子を探つた七の分別と、表門前を徘徊しつ〻中から誰かゞ出て來るのを待受けてゐた。

出入は頻繁であるが生憎と商人や小もの、刀研ぐらゐなもので是ぞと思ふやうな者が見當らぬ、空しく一刻許りも過したが忽ち門内にがら〳〵と高あしだの踏鳴す音がして大股に歩いて來た浪士體の壯漢がある

好スター　中形
粋な　手中
着尺モスリン　本場カヤ
平　龜田屋　電五七

移轉披露

毎度お贔負にあつかりまして誠に有難ふ存じます。今回皆樣の御奬めにより業務擴張の爲め來る

九月六日より

平町新田町　福榮亭跡

に移轉いたします、相變らず御贔負のほどご待ち申しております。

寶來亭　電話三二五番

教授

裁縫　奥田式及び水引細工
華道　古遠州生花、小原流盛花
茶の湯　裏千家

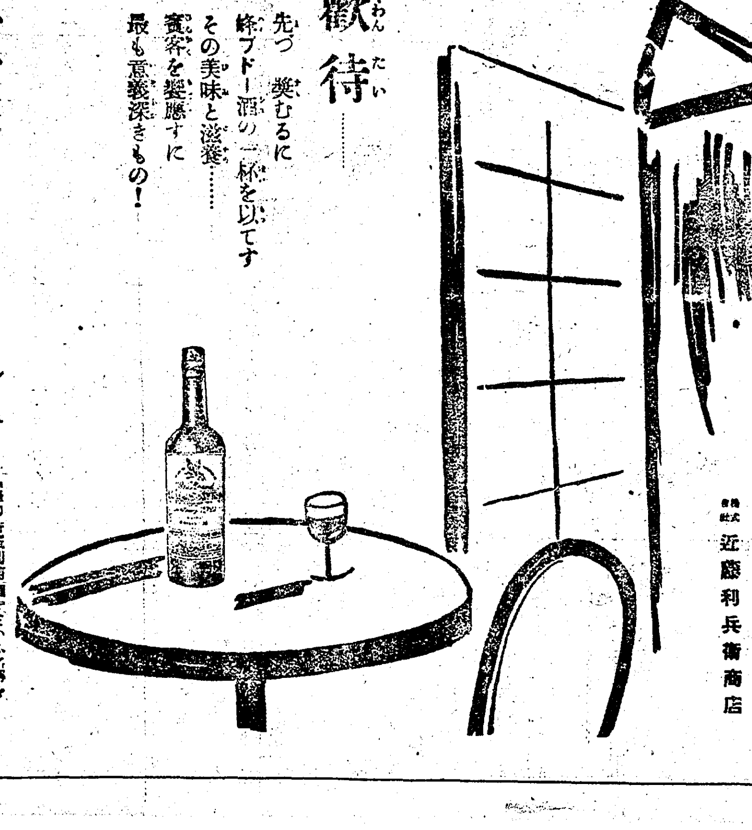
平町白銀町（平劇場前）　高橋光春　電話六三八番

平町紺屋町　吉田眼科醫院

良品廉賣に勝る商略なし

磐城平町五丁目
磐城セメント株式會社特約代理店
和洋銅鐵金物問屋　㊅釜屋商店　諸橋久太郎
電話九番　一三九番　振替貯金口座東京一〇九五六番

確實敏捷は㊅の生命なり



蜂ブドー酒

歡待……

先づ奬むるに蜂ブドー酒の一杯を以てす
その美味と滋養……
賓客を饗應すに
最も意義深きもの！

「蜂印香竄葡萄酒」といふ名稱を皆樣のお奬めに依り且は時勢の推移に鑑み今後『蜂ブドー酒』と改めます　なほ市場にある從來のものは其儘として御安心の上引續き御愛飲を願ひます

合名會社　近藤利兵衛商店

磐城病院改稱　市原病院　平町田町（電話一一四番）

內科、小兒科　市原卯太郎
外科一般、婦人科　市原陸郎
外科、梅毒、淋毒　市原三三男

外科　婦人科　內科　X光線科

外科一般　耳鼻科　花柳科　產科　婦人科

赤心堂病院　平町田町（電四七五）

耳鼻咽喉科專門　大和田醫院　平町南町（電一七〇番）

入院隨時（自炊の便あり）

外科新設

外科專門　部長　藤本順　診療開始

產科婦人科　院長　木村寅次郎　從前通り診療

平町新川町　木村醫院　電話一六四番

三益玉炭のお奬め

三井物産會社ガ多年ノ研究ノ結果專賣特許ヲ得タ最モ文化的ノ木炭代用ノ高級燃料デス

値段ハ壹箱金貳圓　個數ハ約八百個內外

□無煙無臭デ、火付ガ早ク火持チ良ク、火力ガ強ク日常ノにやきニハコンナ便利ナ品ハアリマセン
□ソレデ値段ハ大變お安ク木炭ノ三分ノ一デ充分間ニ合ヒマス
□ドンナニ喰はずきらいノ人でも一度使ヘバ必ズ御氣ニ召スノガ此ノ玉炭ノ特長デス

御申越次第見本ヲ持參シテ御覽ニ供シマスカラ御申越下サイ

平驛前　阿部石炭商店　電話二三七番

鐘や太鼓を用意し 漁港速成運動
相馬の松川と對峙して 豊間村有志出縣

石城郡豊間漁業組合長遠藤々之丞、漁港修築期成同盟會長鈴木倉之助、豊間村長志賀兼吉、同村有志遠藤惣三郎の四氏は縣會議員鈴木辰三郎同野崎滿瀛の兩氏案内にて三日出縣して豊間漁港修築問題に關して陳情したが過般知事に陳情せる際單に補助又附の陳情のみではしやうがないから具體的に設計書を提出するやう話があつたので今回工學博士石川源三氏を依頼して設計もした設計書が提出した右設計書によれば工費十一萬五千圓を要し約三千坪近くの港が出來るのであるが尚ほ豊間には十隻餘の鰹漁船があるが港なきため茨城縣の漁港に船を揚げ漁獲し賣らなければならぬといふので是非共漁港を修築しなければならぬといふので縣も相當考慮をするといふことである、尚ほ漁港修築については相馬に松川、双葉に請戸等に於ても夫々明年度中に於て築港して貰ひたいとしば〳〵陳情したことであるから今回豊間側の出縣運動に對して近くまた之に對抗する爲め相馬双葉の有力家も陳情するに至るべく期して石城對相馬双葉の漁港修築問題について一層猛烈なる運動が惹起するものと見られてゐる

村長放逐を策し 神谷村の紛擾
裡面に何等か潜むらし 平署秘密の調査

神谷村々會は數年來村長派否村長派の兩派に別れ軋轢甚だしく事毎に紛爭を續けてゐたが否村長派は此の程村長々壽男氏が就任以來失政百出を理由として引責辭職を迫るべく決議し盛んに村長排斥の猛運動を開始したがその裡面には何等か理由あるらしいと觀られてゐるが此れを探知した平署は直ちに村長排斥の裡面にからまる何等かを摑まんと秘密裡に活動を開始した

經費の捻出に 頭をしぼる
農試分場躍起

農事試驗場石城分場五週年記念園藝品評會開催に就ては既報の如くであるがこれが經費捻出に關し石城郡農會では過般役員會の結果八百圓を支出することになつたが同時に郡内各町村農會からは五十圓宛均等に支出せしむることを決議しその旨各町村農會へ通知するところあつたがはからずも町村農會中財政逼迫しつゝあるところ或は貧弱な村農會等に於ては右五十圓の經費支出に困難を感じ今日まで之に支出承認をして來たところは僅に數ケ町村に過ぎず準備に取りかゝりたる今日郡農會は勿論石城分場に於ても弱り出して居る

高壓線にふれ 電工墜落
けさ平驛で

草野村大字下神谷字山の內居住平驛構電力區電氣工手篠崎貢(二六)は今四日午前八時十分頃平驛構內檢車所附近の電柱に登り電線の切替へ工事作業中誤つて高壓電線に觸れて跳飛され工作所屋根に墜落更らに地上に顚落したが幸ひに生命には別狀なく南町酒井醫院に昇ぎ込み應急手當を加へたが胸部の打撲傷は全治約三週間を要する見込みであると

聯合軍人分會の 武術大會成績
各種優勝者は夫れ〳〵 神宮競技豫選に

在郷軍人石城聯合軍人分會主催郡下全分會聯合武術大會は既報の如く二日午前九時から磐城中學校武道場に於いて開催郡下各地から選拔の戰士百五十餘名出場軍刀術は平署の鈴木忠正四段銃劍術は麻原、小松、庄司の三氏審判の下に試合開始一本勝負の錯列に依り白熱的激戰の結果優勝者は次の如くである

△軍刀術
平分會藤井一、高久分會藁谷久太郎、渡邊分會高木善枝

△銃劍術
四倉分會本田榮太郎、好間古河礦山分會阿部喜代作、豊間分會遠藤虎一

尚右の前記六優勝者は近く福島市に開催される神宮競技豫選石城代表選手として出場する筈であると

石城 舊名偉人傳(四)
名僧原擔山と鐵眼 學人、神林復所

△原擔山

名は覺仙、幼名良作、鶴巣と號す、故ありて原氏を冒す、文政二年十月十八日平に生る卽ち平藩士發井勇輔の長子なり、幼時藩儒神林復所に學び十五才にして昌平校に入り勉學八年廿五才の時幕府の典醫多紀安叔の門に入り醫を學ぶこと五年、廿六才の春駒込吉祥寺の學寮に聘せられて經會を講ず、既にして佛の尊きことを知る、橋場總泉寺榮禪の弟子となる、後ち四方を遍遊して頗る造詣する所あり明治十一年東京大學に入り印度哲學講師となり尋で學士會員に選任せらる、廿五年七月廿七、病なくして悄然長逝す、茶毘して遺骨を市ケ谷藥王寺前町昌寺に葬る、瞑目に先つこと二十分知友某々へ郵送して曰く「拙僧儀卽刻臨終仕り候此段御通知に及び候也」と此一事以てもその道に造詣せるの深きを知るべし

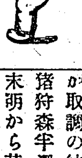
△鐵眼禪師

鐵眼倍名天田五郎は平町の人にして父を平太夫といふ母は林氏幼にして岐疑學を好み、神林人齋に師るし夙に頭角を露はす、戊辰の亂起るに及び十五才にして藩兵に徒つて出陣各所に轉戰し、平定後家に歸れば父母兄弟離散して往く所を知らず東捜西索廿年の久しき殆むど海内に遍しその間或は寫眞師となり或は神官となり、尚しくも父母を索むる爲に使なるべき種々の苦心を積むと雖も影なし、遂に現世に再會し能はざるを知り悲哀自ら禁する能はず、京都修學院の林丘寺に入り滴水禪師の室に得度す、明治廿六年一は父母菩提の爲め二は衆生結縁の爲め南國卅三所觀音を禮拜す、卅四年山城國伏見桃山に草庵を結び愚庵と號す、三十七年一月一日宿痾激發し十七日遂ひに永眠す年五十一才。辭世の詠あり

大和田に島もあらなくに梶緒絶えだよう船の行へ知らずも

△神林復所

平城主安藤氏の儒者なり通彌清助と稱し後讓と改む、復所はその號なり寛政七年六月廿五日生る、幼にして學を好み、十六才にして始めて書史となる、然るに當時平の地は文學振はず、之れを以て就きて學ばんとするも良師なく自ら修めんとするも書籍に乏し、その父自ら節倹をなし書籍を購求して之れを備ふその費も尠からず、復所も亦た寢食を忘て研究餘日なし、然れども斷然父に請ふて東都に遊び大いに學ばんとす、その父亦た見る所あり、その行を壯として勸めて行き學ばしむ、時に年二十才、佐藤一齋の門に入りて螢雪の功を積むこと數年、業成りて歸郷す廿五才にして儒官となり六十四才にして病の爲め職を退き八十六才にして死せり、復所身体絶大せり溫良にして經書を講するや親切懇くも者をして解悟し易からしむ、常に宋學を信じ日夜經義を研究して倦ますその晩年病を以て門を閉づるや書を著し以て樂となす著書二百四十八部あり、而も年老へて視力衰へず、皆自書する所なり藩の子民その學德に服す



逆に戻つた 石城の夏
海濱の賑ひ

平町地方の二百十日は今迄にない樣な快晴であつたが三十一日の夜に雷が鳴つてゐたのと今迄の天候が變態的だつたので、二百十日には大荒になるのではあるまいかと一般から懸念されて居たのであつたが荒れる處か空には一片の雲も無く溫度は九十度を越え、正午から二時頃まで平町は屋內にもヂツとしてゐる事が出來ない程の暑さで今年になつてから一番暑かつたと言はれる程であつたので秋風が立つた大厄日の二百十日に海水浴場が非常に賑つた、石城地方の水稻は恰度開花期に入つたので比較的順調に發育して來つゝある水稻が荒れにでもなる樣な事があつてはと憂てゐたので此の分で暴風雨もなければ一部の地方を除いて平年作程度迄は近づけるものと豫想されてゐる

錦信用組合
組織の計劃進む

石城郡錦村では中堅青年が中心となり農家の利用機關として組織上極めて簡易なる信用組合を設置すべく目下金成村長等と打合せ奔走中で近く實現の運びに到つたが頭初は內容の充實を主として小規模主義に依り漸次擴大する筈である

出炭制限が利き 常磐炭況
愈々値上げを斷行す 需求關係も圓滑

石城郡所在磐城、入山、古河、三井、福島の五大炭礦では炭價維持の非常手段として這般出炭一割制限並に貯炭の販賣禁止を實施したこと既報の如くであるが之れが爲め其の後需求關係極めて圓滑に市場活況を呈して來たので九月一日より一噸五十錢を値上げし更に十月一日より一噸一圓の値上げをなすこととなつたが現狀を持續するときは常磐炭の經濟も根本の立て直しを見る事が出來るであろうと觀られてゐる

變り種の藥屋 (十三)
事業と人 立志傳中の山野邊氏
婦人科の權威 實川醫院

平町に開業以來十年の歷史と常に新らしき學術、技術により聲望とみに擧り今や磐陽乃至界婦人科の權威となつた醫學士實川彌太郎氏は現代稀れに見る人格者である、溫厚にして德操高く研究心に富み常に最新の學術を採用し如何なる難治の疾患も容易に全癒せしむる手腕力量は期せずして衆望を博し今や婦人病科の大家として誰れ知らぬ者なき隆盛を見るに至つたのである帝大の優秀な成績で巢立つた氏は幾多の研讃を積み平町田町に現在の實川醫院を創設した、當時猶は未知數なりし氏の存在價値は幾多先輩同業者の裡に潛む止むなき立場に置かれた事もあつたが、若冠苦を排し然かも天才的技倆を以て誠實患者に接し行くところ可ならざるなき幾多の好事例は直ちに信望を篤ふし婦人病家も知らざるはなき現在の地盤と基礎を築き上げたのである、自宅診療、往診に席温まる暇なき氏の實川醫院は常に門前患者の堵を築き入院患者は四六時中滿員の有樣である、多くの醫員何れも親切、熱心にして患者の氣受けよく遠く多賀、双、相方面より來たり治療を乞ふもの漸く數を增し設備內容の充實せると患者の取扱ひ數に於て正に海岸線屈指の病院である、氏は炭礦地を有する平町並に地方に於ける花柳病豫防に對しては殊に深き研究から生れた持論を有してゐるが後日機を見て發表を乞ふことゝする

山野邊藥局

變り種の藥屋として高尙な人氣の中立にある平町五丁目角山野邊藥局主山野邊東次郎氏は、彼れも亦た當代の偉傑である、學窓を出づると直ぐ內務省の衞生試驗所に暫らく役人生活をなし八字髯に洋袂に折鞄といふ型にはまつた生活に甘むじてゐたが、突如感ずる所あり、之れ等の榮職も地位も弊履の如く打ち棄てて裸一貫のまま實業界に仲間入りをした立志傳中の人である東京で彼の大地震に搖り出され、挨りの儘この平に落ち付いたとき天上天下氏の所有に係るものとては最愛の奥さんと行李一個に過ぎなかつた、其の後開業五ケ年にして現在の隆昌を見せ同業者間の注視を惹きつつある氏の營業方針は絕對他人の追隨を容さざる獨得の強味がある、良品廉價、薄利多賣を與條とし飽まで御客本位にあり、一と度び同店のヒキエを跨ぐものは必らず此の店に對する好感となり最負とならざるはない豪放、磊落の裡に美しき眞情を持つ店主山野邊氏と甲斐〳〵しくも立ち働らく夫人が內助の功とは同店の榮ね行く無形の信用であり限りなき資本である、社會問題殊に政治に趣味を持つ山野邊氏は常に厳然大所高所に立つて腐敗せる現代政治家の內面を痛罵し相手を見れば物暇いらずに論陣を張つて大向ふをうなさせる所隱せぬ氏の性格である、少壯有爲、平町の中堅として將來必らず成す所がなければならぬ。

警察を騙まして 旅費の借り德
呆れ果てたこの頃に 平相談所で用心

世の中の不景氣から失業者の群が町から町に流れ込むのは最近の世相として何れの都市に於ても略同樣の現象である常磐七大炭礦を控た平町は殊に失業者の入り込むのは非常なもので平職業紹介所でも可成り多忙を極めて居るが同時に平人事相談所に泣き込むものが特に增加し同所が與へる旅費は每日相當多額に上り經費節約の折柄同所では困り拔いて居る又斯ふして泣き込む者の中には可成人事相談所の事務に精通して居るものもありその味み占め次ぎから次ぎと旅費を貰つて渡り歩くと云ふのが一方に增加し最近下は人事相談所のこれ等のものに却て惡用されんとしてゐることに鑑み、平人事相談所では今年度の經費が豫定以上に支出して居るためこれを節約する上から旅費取り常習者を一掃するため今後は一人〳〵に就き充分に調べた上止むを得ざる者のみに限つて旅費を支給することゝなつた

鮮人容疑者を捕へ 或は重大犯人
刑事八方に飛んで 平署活動を開始

平署では昨日午前十一時頃小名濱方面から勞働者体の鮮人一名を逮捕本署に引致けの上嚴重取調を續けてゐたが取調の結果青田部長以下猪狩森平澤の各刑事は今朝末明から某々方面に活動を開始し署內は異狀な緊張振りを見せてゐるが事件の內容を仄聞するに某方面に於ける强盜事件に關係せるものの如く然も平署の逮捕したる鮮人は眞犯人であるらしいが共犯者が未逮捕の爲め事件は一切嚴秘に附されてゐる

茨城縣人會
總會と役員改選

植田町の茨城縣人會は二日午前一時より魚川橋畔に參集會員六十餘名中出席者四十名市村支部長の開會の挨拶あつて鮫川に舟を浮べ船中で協議をなしつゝ河口に下り地引網、餘興あり午後一時から酒宴に移り清遊を恣にした役員選ツ結果左の如し

會長國安稔之助、副會長瀧秀夫、常任幹事大竹庫間宮俊一、幹事宮本富吉片岡章、山崎登、小林冬小澤丑五郎、中山吉之助會計矢代正

兒童作品展覽會
御大典記念事業に 出品二千點突破

平町磐城佑賢學舍主催となり石城郡各小學校兒童の御大典記念成績品展覽會を開催することゝなり目下展覽會出品物勸誘中であるが既に各小學校からの出品物は約千六百點出揃つた、この出品物は今月末日に締切る豫定であるがそれまでには二千點を突破するものと見られ從つて同展覽會は非常な盛會を今から期待されて居るなほ同展覽會では成績品の審査をなし、一等より五等までを入賞として夫れ〳〵賞狀及賞品を授與する筈である出品種目左の如し

一綴方、二書方、三圖畫の三種であるが今日までに出品されたものゝ中には非常に優秀なものがあると

弘法大師祭
けふ四倉如來寺で

石城郡四倉町如來寺に於ける弘法大師の例祭は四日盛大に擧行したが遠近より參詣する善男善女で非常に賑つた

浮浪者清藏は 重大犯人か
平署嚴重詮議

平署の猪狩平澤兩刑事が昨三日夜湯本町三函附近を密行中擧動不審な勞働体の男を發見本署に引致の上嚴重取調た處此奴は當時住所不

田人村の火事

石城郡田人村旅人字寶坂小野平次郎方物置の裏手より一日午前一時半頃出火居宅厩物置各一棟を全燒して二時半鎭火原因につき植田署で調査中なるも取灰の殘火らしいと損害約千三百圓

底なしの電話
當選しても寄附金の苦面 平町地方の昨今

平町地方は打ちつゞく不況から電話の架設申込も例年の三分の一に減少し、昨年などの如く權利買賣は餘り目當にならないが、漸く今年も抽籤もきまり十五日以內に架設寄附金第一回の納付即ち三分の一額を納付せねばならぬのであるが此の頃の不景氣では三分の一の寄附金さへも苦面つかず暗中密に賣買が行はれて居る者があるが買手もなく結局今年も棄權者が可成りの數にのぼるだらうと豫想されて居る、又暴落した電話買賣値も抽籤決定後は落ちつくだらうとの一般の豫想を裏切つて相變らず安値で寄附金以下のものさへあり全く底なしの態に下落して行く有樣である

青年の溺死
死体はけさ發見

草野村大字泉崎松本正(二二)は二日午後一時頃大浦村海岸に於いて海水浴中激浪にさらはれ溺死したが死体は四日午前八時同海岸に於いて發見されたので四倉署から係官出張檢視の上で死体は家人に引渡した

嘘の毒もみ
事實は何もなし

平警察署では三日小川村の青年十四名を本署に引致伊藤司法主任が取り調をなした所青年らは舊盆の休みを利用して同村地內の小川に於て毒モミをなしたもので此中に平町某官舍の吏員が關係してゐるとの投書が平署に來たのから活動を開始し檢擧を見たものであるが取り調べの結果官吏が關係してゐる事實はない模樣である

時言

□博士の設計書を携へて縣會議員の東道役で漁港速成陳情に忙がし、縣當局最大の誠意を以て漁民救濟の實を示せ

□村長放逐策を劃し神谷村の紛擾やうやく濃厚の度を增す、何も一村中和の爲めだ、無理が通らば道理引つ込め

□警察を騙まして旅費を稼ぎ歩く不屆者がある、細民の膏血をひぼつた金で物見遊山をする役人のおる世の中だ

□まさか瓢簞から駒が飛び出したほど不思議な話しでもあるまい